妖刀使いと魔法使い

MSF

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妖刀使いと魔法使い

【Ｎコード】
Ｎ５２６６Ｓ

【作者名】
ＭＳＦ

【あらすじ】
ナギ・スプリングフィールドには１人の幼馴染みがいた。だがその幼馴染みは実は転生者だった！よくあるオリ主転生モノです。オリ主最強モノですが多少最強という程度です。一応原作に沿って進めるつもりです

プロローグ

何もないただどこまでも白い空間…気付いたらそんなところに立っていた

「……ここどこ？」

そうつぶやくと杖を持った1人の老人が現れた

「ここはあの世とこの世の境界線じゃよ」

あの世とこの世の境界線…ということは……

「俺は死んだのか」

「やけに落ち着いておるの。ほとんどはあわてふためくのじゃが」

「死ぬ直前のことは覚えていますから」

俺が死んだ原因は簡単に言えば交通事故だ。最も誰かを庇ったというわけではなくスピードを出しすぎて暴走した車にはねられたというものだが

「それよりあなたは誰ですか？」

「わしは簡単に言えば神様じゃ」

神様って…テンプレかよ…

俺が死んだ原因ってこいつがミスった所為とかか？

「おぬしが死んだのは決められた運命（さだめ）じゃよ」

心を読まないでください

「その証拠は？」

「これじゃ」

そう言うと完全に溶けている蝋燭が付いた台座と火が灯っている蝋燭が乗っかっている台座をどこからともかく出現した

「この蝋燭は？」

「完全に溶けきっている方がお主の、火が灯っているのはお主の父親のものじゃ。そしてこの蝋燭は残りの人生の長さを表しておる。これで納得したかの？」

「はい。疑って申し訳ありません」

「気にせんでよい、わしは気にしておらんからの。さた、それでは本題にはいるがいいかの？」

「構いません」

「解った。まずここにお主を呼んだのは取引をしたいからじゃ。見返りは異世界への転生。ちなみに世界は『ネギま！』じゃ」

「ちょっと待て、ネギまは漫画だ。転生なんて出来るはずが」

「出来るのじゃよ。それにちゃんと存在もしておる」

どうゆう事だ？漫画の世界だぞ。いやでも存在すると言っていた……。となると平行世界か？……いや考えるのは後だ

「条件は？」

「話が早くて助かるの。条件は創造主（ライフメーカー）の排除または弱体化及び魔法世界の崩壊の阻止。この二つじゃ」

よりにもよって超難題だな

「神様は直接干渉したり出来ないのか？」

「残念じゃが出来ないのじゃ。だからこうしてお主を呼んだのじゃ」

確かに直接干渉できるならわざわざ転生させる必要はない

「だが俺は素人ですよ。それに特殊な能力があるわけじゃない」

「能力や武器はこちらで用意するから大丈夫じゃ。それに修行はこの世界ですればよい」

それなら安心か

「解りました。引き受けましょう」

「契約成立じゃな。ではお主の武器や能力はどうする？何だったらチート設定も有りじゃぞ？」

「チートは好きではないのでやめておきます。そうですね、では『１１ｅｙｅｓ』の草壁七剣を貰えますか？あと原作に出てきた陰陽術と忌剣と契約の虹を使えるようにしてください」

「草壁七剣…となると、真打・童子切安綱、火車切広光、雷切、小烏丸天国、鉋切長光、鬼切、蜘蛛切
の七本じゃな。陰陽術と忌剣と契約の虹に関しては修行するしかないの。それと妖刀は人の身では使えんからハーフということになるが構わんかの？」

「ええ。構いません」

「うむ。では」

神様が持っていた杖で床を叩くと扉が現れた

「この先は修行をするための空間じゃ。そこにはお主に稽古をつけてくれる者達がおる」

誰がいるかはおおかた見当が付いてるけどな。というか間違いなくゲオルギウスと草壁操だろうな

「わかりました。それでは」

「うむ。達者での」

そうして俺は扉をくぐった

プロローグ（後書き）

感想よろしくお願いします

プロローグ2

え～、皆さんお久しぶりです。修行を開始してから地上の年月で言うと２００年くらい経ちました

何故くらいなのかというとここは時間の概念がないので細かくは解らないからです

閑話休題

俺はさっきまで修行の最終テストを受けていた。今は師匠達（アワリティアとスペルビア）の判定を待っている

「判定が決まったぞ」

「それで結果は……」

試験の結果発表っていつも緊張するな

「合格だ」

「よ、よかった～」

緊張が解け思わずへたりこんでしまった

「まあこれで不合格だったら容赦なく叩き潰すところだがな」

……冗談に聞こえませんよ師匠……

「どうやら無事に修行は終わったようじゃの」

久々に神様登場。そういや修行中は一度も見かけなかったな

「主よ、どうかなされたのですか？」

「いや、少年のスペックについての会議の結果が出たのでそれの説明しなければならんのでな」

「はぁ」

「いろいろあるがまずは妖刀についてじゃ。真打・童子切安綱じゃが本来なら所有者の命を削るのじゃが今回は魔力を削る仕様になっておる。理由としては無闇に命を削って目標を達成する前に死なれては困るからじゃ。まあ妖刀としての格はわずかに落ちるがの。他の妖刀の奥義なんかも妖気ではなく魔力を使って繰り出すようになっておる

それとお主にはどちらか片方の目標を達成するまでは不老不死になって貰うからの。成長は１８歳で止まる。この理由は童子切と同じじゃ。

魔力量に関してはナギと同じくらいじゃ。理由は消費量の多さじゃな。平均的な量では『契約の虹』は使えんからの。

剣術の才能に関してはは天才レベルじゃ。魔法に関する才能は魔法の矢が使える程度し

かない

まあ、こんなところかの」

妖刀のの変更はありがたいな。所有者の魔力と刀の妖気では回復速度がかなり違うからな。魔力量に関しては十分だろう。予想では魔力が満タンの状態で『契約の虹』を使える回数は７発±２といっ

たところか。不老不死は首輪のようなモノだろうな

「何か質問はあるかの？」

「目標を達成したら不老不死ではなくなるのか？あと何か印みたいなモノはあるのか？」

「不老ではあるが不死ではなくなるの。それと印に関しては右手の甲にＦａ〇ｅの令呪のようなモノが浮かび上がるのでそれで確認するとよい」

「分かりました。ありがとうございます」

「礼には及ばんよ。では草壁七剣、受け取るがよい」

爪に封印の術式を刻み草壁七剣を受け取り自分の中に封印する

「それと爪の術式と右手の印じゃが生まれてしばらくは見えんが五歳の時に記憶が戻るのじゃがそれと同時に浮かび上がるようにしておる」

確かに生まれた子供に術式が刻まれていたら最悪忌み子として殺されるかもしれない

「では行くがよい」

神様が杖で床を叩き扉を出現させる

「では、いってきます」

「達者での」

「気を付けてな」

「幸運を祈っている」

師匠達に見送られながら俺は扉をくぐりこの世界から去った

プロローグ2（後書き）

感想お待ちしております

主人公設定（初期）

名前：ヴァン・エウリディーチェ

性別：男

年齢：１０

種族：半魔族

身長：１３７ｃｍ

体重：４１ｋｇ

性格：冷静沈着。ただし少しだけ戦闘狂（バトルジャンキー）

魔力量：ナギと同等

好きなモノ：生き物（台所の黒い流星以外）

嫌いなモノ：自分の剣を馬鹿にする人、わさび、からし

所有武器

草壁七剣（真打・童子切安綱、小烏丸天国、火車切広光、雷切、鉋切長光、鬼切、蜘蛛切。妖刀としての力を解放するさい消費するのは刀の妖気ではなく所有者の魔力に変更されている）

式神（分身にすることが出来る。また飛ばして攻撃も可能。一枚一枚は弱いが束になるとかなり強い）

能力

魔法に関しては魔法の矢が使えるだけで、それ以外は基本魔法しか使えない。そのため魔法戦闘のスタイルは魔力量にモノをゆわせた物量作戦が主

陰陽術はわずかだが使える程度。具体的には式神と妖刀の解放、術が数個だけ

使用可能な忌剣は夜駆け、斬月、暁鴉（あけがらす）、八握脛（やつかはぎ）、友切、蟲喰（むしばみ）、吼丸の七つ

備考

神様によって目的を達成するまで不老不死の呪いが掛けられている

五歳の誕生日の翌日に転生する前の自我が復活する。同日の深夜に草壁七剣を受け取っている。その際封印術式を手の爪に刻んだため翌日から長手袋を着用している

呪いの印は包帯で隠していた

主人公設定（初期）（後書き）

おかしなところがあったら教えてくれるとうれしいです

第一話

どうも皆さんお久しぶりです。ヴァン・エウリディーチェ、１０歳です。前世の自我が復活したのが五歳の時で草壁七剣を受け取ったのも同じ時だったな。にしても自我が復活するときは大変だった。何せ十数年分の情報が一気に送られてきたからな。頭が割れるかと思った。

閑話休題

えー、現在俺達がいるのは――

「こんな学校こっちから止めてやらあ！」

「失礼します」

「ま、待ちたまえナギ君、ヴァン君！」

校長室に呼ばれ説教をされ、ナギと共に自主退学をしたところ。ちなみに罪状はナギが教師への悪戯＆暴力。オレは模擬戦の相手を契約の虹の実験台＆模擬戦で怪我を負わせたことだった。まあ俺がやるのは虐めをした奴限定だからな。しかも模擬戦だから多少の怪我は言い訳が通る。ナギはまあよくやるからいつもと同じだな。こいつブレーキ役がいないとどこまでも突っ走っていくからな。わかりやすく言えばブレーキのないＦ－１だな。

「それで学校止めてこれからどうするんだナギ」

「どうすっかな」

「考えてなかったのか……」

「じゃあヴァンはなんかいい案あるのかよ」

「そうだな……じゃあ旅にでも出てみるか」

「お！それ面白そうだな、じゃあそれにするか！」

早速食いついてきたな

「まあ待て。旅をするにしても目的地とかはどうするんだ」

「う～ん、そうだな……。よし、旅の目的は魔法世界と旧世界を回ることだ！」

またずいぶんと漠然だな

「分かった。それじゃ旅の目的は魔法世界と旧世界を回ること。これでいいな」

「おう！」

「それじゃお互いいったん家に戻って準備をしよう。集合は一時間後。場所はナギの家の前でいいな」

「俺もそれでいいぜ」

「それじゃ一時間後に」

「ああ！」

こうして俺とナギは旅に出ることになった

第一話（後書き）

感想よろしくお願いします

第二話（前書き）

ようやく書けた…

初めて体験しましたが時差ボケってつらいですね

授業中はほんとにつらい

第二話

学校から家に戻り旅の支度もし終わりいざ出発と思ったがそうは問屋が卸さなか

った。皆さんは忘れていないだろうか。現実に存在し、ゲームのラスボスよりも隠

しダンジョンの一番奥にいるボスよりも手強い存在。そう母親という存在を

「なぁ、ヴァン」

「なんだナギ」

「どうしてこうなったんだろうな……」

「さあな……」

俺とナギは現在俺の家で正座をさせられながらお説教されている。何故こうなったのか簡単に説明すると出発しようとしたところを母さんに見つかり有無を言わさず強制連行され事情を無理矢理吐かされ今に至っている

「まあ、あんた達が旅に出ることについては反対はしないわ」

これまた以外だな。てっきり猛反対されるかと思ったが

「ただし条件があるわ」

「条件というのは……」

さすがのナギもどうやら母さんには逆らえないらしい。まあ小さいときから世話になってきたからな。それよりも条件とやらにすごいいやな予感がする

「あたしが教えるサバイバル知識を全て一週間で覚えなさい。これが条件よ」

お、終わった……ｏｒｚ

母さんが教えるサバイバルの知識を一週間で全て覚える？完全記憶能力でもないと無理だ

「そんなこと覚え無くても平気ですよ」

ナギが敬語使うとすごい違和感があるな

「甘いわね。サバイバル知識といってもいろいろあるのよ。少なくとも動植物に関する知識だけは覚えて貰うわ」

「それこそ必要ないんじゃ」

「アンタ馬鹿？確かに大半のモノはちゃんと調理すれば食べらっれるわ。でもね中には毒を持っているのもいるの。それの見分け方や毒への対処法を知っているのと知らないのとではかなりの違いがあるの」

「は、はあ…」

「えっと、それはいつから始めるの？」

「もちろん今からよ」

「「う、嘘だろ……」」

こうして地獄の講習会が始まった

〜一週間後〜

俺達は何とかあの地獄の講習会を生き残った。にしてもあれは死ぬかと思った。

もはやスパルタとかそういうレベルじゃない。なぜなら一問間違えると魔法で身体強化した拳骨が飛んでくるのだ。二問目以降は魔法の矢が飛んでくる。あまりにひどいと古代語魔法が飛んでくることもあった

ともかく俺達は地獄を生き延びたのだ。初めて生きていることが素晴らしいと思った

「ようやく旅に出るな」

「そうだな」

「とりあえずどこに行くか決めるか」

「ならこの町から西に徒歩で一週間ほどに行くと山脈があるからそこに行ってみるといいよ。面白いものが見れるから」

「面白いもの？」

「母さん、変なものじゃないよね？」

「それは見てからのお楽しみね」

お楽しみって……嫌な予感しかしないんだけど

「ふ～ん。じゃあそこから行こうぜヴァン」

「わかった」

「気を付けるのよ～」

こうして俺たちは旅出た

～一週間後～

俺たちは母さんが言っていた山脈に到着し早々に「面白いもの」を見つけた。いや、見つけてしまった

「すげーなーヴァン」

ナギは目を輝かせながらそんなこと言う

「そんなこと言ってる場合かよ」

母さんが言っていた「面白いもの」……、それは竜種だった

しかも目の前にいる竜は空腹なのか性格が狂暴なのかとても俺たちを見逃してくれそうにない

「仕方がないか」

こちらとて食われるのはごめんだ

「牡《と》籥（かぎ）かけ一闔ざす総光《そうこう》の門――
七惑七星《しちわくしちせい》が招きたる、由来艸阜《ゆらいそうふう》の勢《せい》――
禄存零零《ろくぞんれいれい》、急ぎて律令の如く成せ、千歳の儔《ともがら》――」

呪文を唱え掌に現れた陣から刀を引き抜く

「鉋切長光」

「お、なんだ戦うのか？」

「ああ。とても見逃してくれるとは思えないからな。それに向こうも戦う気は満々のようだしな」

「へっ、そうこなくっちゃな！」

「GYAOOOOOOOOOOOOO!!!」

三十分後

そこには地面に横たわっている一頭の竜と座りこんでいる二人の子供がいた

「何とか終わったな（さすがに全解放はまだつらいな）」

「ああ。にしても案外たいしたこと無かったな」

「それはそうだろう。こいつ成体になっていないからな」

「成体？」

「大人って事だ。おそらく幼竜と成体の間くらいか。それにこいつ通常種だからな」

横たわっている竜を見ながら言う。ちなみに死んではいない

「通常種？」

「言葉どうりだ。竜には幾つか種類があって今倒したこいつみたいに四本足で翼があるモノが世間で言う竜だ。前足が退化して飛ぶことに特化した竜を疾竜（ワイヴァーン）、両足と翼が退化し水中での活動に特化した竜を水竜（ハイドラ）、翼が退化し両足が太くなり地上での活動に特化した竜を地竜（ウィルム）と呼んでいる。さらに各竜には通常種と亜種の二種類がいる。簡単に言えば亜種というのは通常種に比べ何らかの理由で強力な個体へと進化したモノだな」

「そんなのもいるんだな。一度戦ってみたいぜ」

「馬鹿かお前は。今の俺達じゃ餌になるのが落ちだ」

「え～そんなこと無いだろ」

「通常の、しかも成体にすらなっていない奴を二人がかりで倒すのに三十分も掛かってるんだ。無理に決まってるだろ。それに亜種が現れる確立は千分の一。学者だって一生に一度見るか見ないかなんだ。まず会えないと思っていい」

「ちぇ～、つまんねぇの」

ナギはそうぼやくと思わず溜息が出た

「はぁ～。まあいい。とりあえずもうすぐ暗くなるからテントと夕飯の準備をしよう」

「ヴァンよろしく～」

「お前も手伝え！」

寝そべりながら手を振るナギを蹴飛ばした

～一週間後～

え～、現在俺達は、というか俺は大変困っている。で、その原因はというと俺の足下にいる

「きゅくる～」

一匹の疾竜（ワイヴァーン）の雌の幼竜。しかも青色＝亜種。おまけにナギは薪を拾っている途中に二匹の疾竜の遺体がありそのすぐそばに割れた卵

があったという。方向からしてこの幼竜で間違いないだろう。つまりこいつらには外敵から守ってくれる親がいないため放っておくと外敵に襲われ食べられてしまうのがおちだ。運良く襲われなかったとしても自分たちで狩りをするだけの力がないため餓死するのは確実。それを見捨てることができるか？否、断じて否！なのでこいつらは俺が育てる！

「で、どうするんだそいつ？」

「俺が育てる！たとえ反対されたとしても！」

「いや、俺は別に構わないんだけどさ、育て方とか分かるのか？」

「問題ない。それに前例がないわけじゃないからな」

それでも過去に一度だけだが

「じゃあ餌とかどうすんだ？やっぱりミルクなのか？」

「哺乳類ならそうだが竜はどちらかというと爬虫類よりだからな。生まれるのも母体じゃなくて卵だし。だからミルクじゃなく肉だな」

そう言って俺は昼飯用に狩ってきた鹿の肉をナイフで食べやすい大きさに切り分け、前に差し出すとよほどお腹が空いていたのかもの凄い勢いで食べ始めた。

「はは、すごい勢いだな」

「いや、凄すぎるだろ」

さすがのナギも呆気にとられているようだ。まあ確かに大食い選手に負けないくらいの勢いだからな

「きゅーきゅー！」

どうやらまだ食い足りないようだな。というかこんな小さな体のどこに入るんだ？俺の膝と同じくらいの大きさしかないのに

とりあえず急いで肉切り分けていく。そして気づいたときには十キロ以上あった鹿はきれいさっぱり無くなっていた

「……なんかいろいろな意味で凄いな、ヴァン」

「……ああ、そうだな」

特に量とか、勢いとか

ちなみに今は俺の膝の上で熟睡中。満腹になったら眠くなったようだ

「そういやこいつらの名前どうすんだ？」

「そういえば決めてなかったな」

ん～、そうだな

「よし。それじゃあリオだ」

「きゅく？」

どうやらうるさくしすぎて起こしてしまったようだ

「おはようリオ」

「きゅく？」

「ああ、お前の名前だ」

「きゅく～」

どうやら気に入って貰えたようだ。そしてナギ。何故お前は首をかしげてるんだ

「なぁヴァン。なんて言ってるのか分かるのか？」

「大雑把だがな」

「魔法でも使ってるのか？」

「俺がいつ呪文を唱えた」

「無詠唱得意だろ」

「得意だがそもそもそんな魔法無いだろ」

「いやでも登校地獄の魔法があるくらいだし」

「お前そんなあほみたいな魔法覚えたのか……」

「いや、覚えてないぞ。あんちょこには書いてあるが」

こいつやっぱり馬鹿だ。そんな魔法いつ使うんだ

「そんなのメモするんだったら魔法暗記しろよ」

「いや、暗記は苦手でさ～」

頭をかきながら言い訳をするナギ

「と、とにかくこれからどうするんだ？」

露骨なまでに話題を変えようとする。まあ追求する気はないが

とりあえず荷物を調べのこりを確認する

「食料がもう残り少ないからいったん街に行って食糧を補給する必要があるからな。後適当な仕事見つけて金を稼ぐくらいだな」

「食料は後三日分くらい残ってなかったか？」

「保存食はなるべく残しておきたいからな。リオの分は途中で動物を狩ればいいとしても街までの距離はさほど遠くはないが余裕はあったほうがいいからな」

「じゃあ支度すっか」

「そうだな」

「こんな所に人がいるとは珍しいの」

とっさに声がした方向を振り向くとそこには鞄を背負った1人の老人がいた

「おい爺さん、あんただれだ？」

（何であなたがここにいるんですか神様……）

どうやら、ナギは警戒しているようだ。まあさっきまで気配すら感じなかったのにいきなり現れれば当然だろう

「わしか？わしはただの商人じゃよ」

商人って……一応話を合わせておくか

「商人のあなたが何故こんな所に？」

「ここは珍しい薬草が採れるのでの。よく来るんじゃよ」

「護衛も付けずにか？」

「護衛はかえって竜達を刺激してしまうからの。それにいてもたいして変わらんからの」

たしかに並の者では竜に対抗するのは不可能だ。それ以前に誰も引き受けないだろう

「それにしても竜の子を手懐けるとは。一体何をしたんじゃ？」

リオを見ながらつぶやく。神様も不思議に思う事ってあるんだな

「特に何もしていませんよ？この子の方から近寄ってきましたから」
「なんと。あの竜が子供とはいえ自ら人に近づくとは」
竜の知性は人間より高いと言われており、また誇り高い生き物でもある。そのため他の生き物を配下に置くことはあっても自ら近寄ることはまず無いのだ
「不思議なこともあるもんじゃな。そういえば面白い物があったの」
そう言って神様はいきなり自分の荷物をあさり始めた
「何やってんだ爺さん？」
そう問いかけるが神様は何かを見つけるのみ夢中になっているため全く聞こえていないようだ
「これじゃこれじゃ」
神様は鞄からビンを取り出した。ビンの中には丸い何かが一つはいっていた
「これはわしの友人が研究中に偶然作り出した魔法薬での。動物を人に変えられることが出来るのじゃ」
神様の友人となると当然神なんだろうな。それにしても人間に変えるねぇ。幻術みたいなものか？
「それは姿を変えるということですか？」

「半分正解かの。どのくらい変わる、というか人に近づくかは動物の種類にもよるがの。まあ竜となると姿を変えるくらいしか効果はないから寿命灘はそのままだと思うがの。まあ門外漢なので詳しいことはよく分からんが。まあ部分的に変わらずにいる箇所もあるようじゃが。実験したときは犬に与えたのじゃが人になっても耳と尻尾はそのままだったの」

リアルで犬耳と尻尾かよ。恥ずかしすぎないかそれ

それにしても根本から変わるか。さすが神様と言うべきなのかねこれは

「まあ百聞は一見にしかずじゃ。食べさせれば分かる」

神様はそう言い掌に擬人化薬（今命名）をリオの前に差し出した

食べるわけがない。俺はそう思っていた。だが意外にも自ら進んで薬を飲み込んだ

リオが薬を飲み込むと体が突然光だし形が変わっていく。そして光が消えるとそこには二本の角と小さいが翼が生えた青髪の十歳くらいの少女がいた。ちなみに角は左右の側頭部に一本ずつ後ろ向きに生えている。そして何故か裸

「……本当に人になった」

「どうやら成功のようじゃな」

「ッ！！」

いくら神が作った物とはいえ本当に人になるなんて。そしてナギ。何でお前は鼻を押さえて反対側を向いてるんだ？

「ナギどうかしたのか？」

「何でもないぞ？俺はいつもどうりだ」

（後ろを向きながら言っても説得力無いのだが。見られたくない物でもあるのか？）

よく見るとナギの足下に赤い点が幾つか地面に出来ていた

（ナギの顔の真下当たり。となると）

「……鼻血？」

「……違う」

「あの～」

ナギと話しているとリオが話しかけてきた

「なんだリオ？」

「えっと、服かなんかないかな？さすがにこの格好は恥ずかしいから」

そいえばリオって今裸なんだっけ。ちょっとまて今この状況を第三者に見られたらどうなる？

……まずい、牢屋に入る場面しか思い浮かばない

「爺さん、服持ってないか？」

「あるぞ、ほれ」

いつのまに出したのか分からないが持っていた女の子用の服を渡された。そしてそれをリオに渡す

「それじゃあ着替えるからこっち見ないでね」

「分かってる。それより早く服を着てくれ。この状況を誰かに見られたらかなりまずい」

「は～い」

とりあえずリオが服を着ているうちにナギの様子を見るのと爺さんというか神様から理由を聞き出すとするか

え～とナギは…何か血の池に沈みかけてる！お前はムッツリーニか！？

「ナギ！？大丈夫か！？」

「ああ、大丈夫だ。にしても危なかったぜ。無理やり川を渡らせられることろだった」

無理やりって…。天国の人って意外と強引なのか？

「この出血量で平気なのはおかしいじゃろ」

後ろで神様がなんか言ってるけど無視してもいいよな。気にしたらきりがないし

とりあえずナギは平気そうだから次は神様か

「それじゃ爺さん、いや神様、なぜあなたがここにいるのですか？」

「そのことについてはこれに書いてある」

懐から出した一枚の紙を渡しながらそう言った

「それとあの嬢ちゃんが飲んだ薬のことも書かれておる」

「どういうことですか？」

「読めばわかる」

「そうですか」

姿が人に変わっただけでもすごいのにまだ何か有るのか

「マスター服着たよ」

どうやら着たようなので振り返る

「どうかな、似合ってるかな？」

「ああ。よく似合ってる」

「えへへ、ありがとマスター」
「そういえばリオ」
「何？マスター」
「なんでマスターなんだ？」
契約した覚えはないんだが
「ん～、なんとなく？」
いや、そんな首を傾げながら言われても困るんだが
「じゃあ仮契約（パクティオー）しちまったらどうだ？」
「は？」
「それがいいの。では」
いきなり神様が俺とリオの足元に仮契約（パクティオー）のための魔方陣を展開する
「ちょっと二人とも当事者の意思無視して進めるなよ！」
「でもリオは満更でもなさそうだぜ」
「え？」
ナギに言われてリオを見ると顔を赤くしてうつむいているが嫌という感じではない。むしろ嬉しそう

「お主も覚悟を決めたらどうじゃ？」

はあ～。やるしかないか

「わかっt、んぅ！？」

わかったと言おうとしたらいきなりリオにキスされた

不意打ちってありですか

そして俺とリオの間に一枚のカードが現れた。カードには赤い手袋を嵌めたリオが描かれていた

「これで仮契約完了じゃな。マスターカードはお主に。コピーカードは嬢ちゃんじゃ」

「ありがとうございます」

「ありがと」

「礼はいらんよ。それよりも嬢ちゃんはカードの使い方は分かるかの？」

「ううん」

「では教えよう。といっても使い方は二つしかないがの。まず一つ目はアーティファクト（アデアット）を呼び出すのじゃ。これは手に持って”来れ”と言えば出せる。しまう時は去れ（アベアット）じゃ」

「うん、わかった。やってみる。”来れ”」

カードを手に持ち唱えるとリオの両手に赤い手袋が嵌っていた

「アーティファクトに関しては自然とわかるはずじゃが。どうじゃ？」

「うん、わかるよ。手袋の全部の指先に鋼糸がついてる。あと鋼糸は限界は分からないけどいくらかは伸ばせるみたい」

鋼糸って……、またずいぶんえげつないものが出てきたな

「なあヴァン。鋼糸ってなんだ？」

「簡単に言えば鋼鉄を糸状にしたものだ」

「そんなので切れるのか？」

「少なくともそこいらの鈍らよりは切れる。それに刃がないから刃こぼれすることも無いし、重量もほとんど無い。おまけに細いから目で捉えるのも難しいときた。ま、制御に失敗すれば大変なことになるがな」

説明するとリオがいきなり顔が青くなってブルブル震え始めた

「た、大変なことってどうなるの？」

「そうだな、一言でいえばスプラッタ」

なんかさらに震えだした。それに顔色がもう青色をとうりこして

白くなってる

「まあきちんと制御の訓練をすれば問題ないじゃろ。それよりもお主、誰かと仮契約しておるか？」

「確かにしていますけどよく分かりましたね」

でもなんで神様は俺がリオ以外と仮契約しているってわかったんだ？実はオコジョ精霊とかじゃないよな

「まあなんとなくじゃよ」

なんとなくで分かるもんじゃないと思うのだが。まあそこらへんは神様だからと無理やり納得しよう

「それでヴァンのアーティファクトってどんな感じなんだ？」

（まあ当然聞かれるわな）

俺は懐から仮契約カードを取り出すとみんなに見せた

カードには肩に刃が金色の鎌を担いだ俺が描かれていた

「アーティファクト名は命の借り手。能力としては刃の形状を自在に変更可能。さらに持ち主の手から離れた場合自動的に戻ってくる。と、こんなところか」

「自動で戻ってくるのか便利だな。そういやいつのまに仮契約したんだ？」

「旅に出る前日。相手は母さんだよ」

「マスターはお母さんと仮契約したの？」

「そこまで珍しいことじゃない。実際仮契約の相手は血縁者が一番多いからな」

「へえ～。そうなんだ」

だいぶ話し込んでしまったな。そろそろ出発しないと町につくのが夜になってしまう

「そろそろ出発しようと思ってるんだが二人ともいいか？」

「ああ、いいぜ」

「あたしも」

「ではここでお別れじゃな」

「そうですね・ではおきおつけて」

「お主たちもな」

そうして神様は山頂のほうへと去って行った

俺たちはそれを見届けた後荷物をまとめ街へと向かった

あと神様にもらった手紙だが宿で借りた部屋で読んだが、内容がほとんど愚痴だ

った。しかも上司の無茶ぶりに関してが六割。あとの四割は部下の失敗についてだ

った。なんでもミスで人を死なせたとか。

そんなのでいいのかよ……

まあ一応リオに関することも書いてあった。簡単に言えば体は人と同じ。あと俺

と同じ呪いを受けているらしい

第二話（後書き）

なんかものすごいやってしまった感が……

え～、感想などございましたらよろしくお願いします

第三話

俺とリオ、ナギが旅に出てから3年がたった。

旅の途中に仲間に加わる物好きもいた。加わったのは神鳴流の使い手である青山詠春、重力魔法を使うアルビレオ・イマの二人だ。人数が増えたので俺達はチームを作ることにした。これが「赤き翼」の誕生であった

それからしばらくして連合と帝国による戦争が起こった。原因は分からない。そして何故か俺達「紅き翼」は戦争へ参加することとなった。

だが俺達の実力がいくらずば抜けていても人数はたったの五人だ。そのため俺は戦力強化と言うことでナギと仮契約を行うことになった。手に入れたアーティファクトの名前は「修羅の剣」。形状は片手剣であるため慣れる必要はほとんど無いのだがかなり問題があった。

まずレア度が「いどのえにっき」とほぼ同じ。そのためかアーティファクト目当てで襲いかかってくる奴らが後を絶たなかった。さらに制約もやっかい際わりないモノだ。なにせ他の攻撃手段が扱えなくなるのだ。だが瞬動や身体強化使える分ましだろう。そしてこの剣の能力だが制約を引いても十分お釣りが来るらしい。その能力だが「あらゆる存在を切り裂く」というモノなのだがよく分からない。

さて今俺達はオスティアの首都にいる。理由は帝国の大部隊に攻撃を受けているとの連絡がありその援護をするためだ。

「遅かったか」

「にしても随分いるね。過剰戦力もいい所じゃない？」

リオの言うとうり帝国の戦力は小国の首都を落とすには多すぎるくらいだった。だが『黄昏の姫御子』にはそれだけのことをするほどの価値があるということなのだろう。

俺達は帝国の目標である『黄昏の姫御子』がいると思われる塔へ急行している

「『黄昏の姫御子』……。何だってそんなもん！？」

「歴史と伝統だけが売りの小国ですからね」

「それに軍事にはほとんど力を入れていないからな。他に手段がないのだろう」

「だが王族だろ！？まだ小さな女の子だって聞くぜ」

「冷静になれナギ」

「俺は冷静だつーの」

鬼神兵の一体が塔に辿り着き最上階に向かって手を伸ばす

「させるかよ！」

ナギが鬼神兵の胴をなぎ払うと鬼神兵はそのまま倒れていった

「そんなガキまでかつぎ出すこたねぇ。後は俺達に任せときな」

「お、お前は……」

「紅き翼……千の呪文の……」

「そう！！ナギ・スプリングフィールド！！またの名をサウザンドマスター！！！」

「自分で言ったよコイツ……」

「フフフ、ノリノリですね」

「コイツに羞恥心はないのか……」

「馬鹿だから無いんじゃない？」

（リオ、お前なにげにひどいこと言うな）

そんなお喋りをしている間にもナギは千の雷で鬼神兵をなぎ倒し俺達は戦艦を潰していく

「安心しな。俺達が全て終わらせてやる」

自信満々に言い放つナギ。その自信はどっから来るんだ

「敵の数を見たのか！？お前達に何が……」

「俺を誰だと思ってるジジィ。俺は最強の魔法使いだ」

「ドヤ顔で何言ってるんだお前は」

自分で自分のことを最強なんて言う奴始めてみたぞ

ナギとアルが後ろで何か話しているが無視し、部屋の中心に両手を鎖で繋がれた女の子に近づき鎖を蜘蛛切で切断する

「お嬢ちゃん名前は？」

「ナ…マエ……？」

「アスナ……アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア」

これはまた随分長い名前だな。だが……

「アスナか、いい名前だ」

「マスター、行きますよー！」

「わかった！…アスナ待っていろ」

「いくぞ、ヴァン！リオ！アル！詠春！
敵は雑魚ばかりだ。行動不能で十分だぜ」

そして俺達は敵を追い払うために戦場へと向かった

これが『黄昏の姫御子』と『紅き翼』の出会いだった

第三話（後書き）

この後書きはリア充には見えません

まあ嘘ですが

というわけでアスナ登場でした

感想よろしくお願いします

第四話

オスティアの一件から数ヶ月が経った。

俺達はあれらも戦線を転々としていた。

変わったことと言えば仲間にゼクトが加わったことと俺とリオに異名が付いたことくらいか。俺は「黒翼の戦神」、リオは「血濡れ(ブラディ)の舞姫(クイーン)」。しかし戦神というのは大袈裟すぎるような気がするが。前に帝国兵一万五千を俺とリオの二人で殲滅したのが原因か？あの後ゼクトに「お主等もバグキャラか」と言われたな。だったらナギはどうなるんだ。あいつは1人で帝国兵一万を壊滅させたぞ。

まあナギなんか千の呪文の男なんて呼ばれてる、というか自分で言ってるし、気にしても仕方がないか。

あと俺の右目は機械眼と呼ばれるマジックアイテムと融合している。これは従来のモノとは違い使用するには適正があるらしく俺にはそれがあった。これの使い道は記録されている魔法を所有者の魔力を使い発動するといったモノだ。俺は剣士だから魔力は咸卦法と妖刀の力を使う位だ。まあ、妖刀の力を使う機会など将軍クラスの相手と戦う時くらいだ。なので魔力がたくさんあっても宝の持ち腐れ状態だったので使い道が出来たのは正直ありがたい。

それに機会眼に記録されている魔法は西洋魔術とは違うモノだった。魔法の種類には他にも陰陽術、ルーン、ケルト魔術、密教、錬金術、祓魔式(エクソシズム)などいろいろあるがどれにも当て嵌まらなかった。文献で得た知識だから実際はどうかは分からないが。

西洋魔術と比較してこちらは、詠唱が短い、始動キー及び媒体が必要ないなど、利点がある。記録されている魔法は種類は九種類とそこそこ有る。そして機会眼を起動させるとなぜか背中に黒い翼が生えてくる。なぜだ？

とりあえずこんな所か。

◇

現在俺達は鍋を食っている。

「こいつが日本の鍋料理って奴かぁ。じゃ、早速肉を～」

開始早々肉を投入しようとするナギを殴って止める。

「痛ッ、何すんだよヴァン！」

「順番を考えろ馬鹿。まずは野菜からだ」

「いいじゃねぇかよ旨いもんから先でよ。ホラホラ」

さらに肉を投下していく。

「トカゲの肉でも旨いのかのう？」

「トカゲも肉食だから臭いがかなりきついと思うよ？」

「そうなのか」

リオ、少しは止めるの手伝ってくれてもいいと思うのだが。

「バッ、バカ、火の通る時間差というものがあってだな。まずは野菜を入れて…あーちょっ」

「あー、うっせ、うっせーぞ、えーしゅん！」

「詠春、止めるだけ無駄だと思うよ？」

「ならリオのアーティファクトで」

「あたしのアーティファクトをなんだと思ってるの？バラすよ？三等分にバラして冷蔵庫に詰めるよ？」

詠春をリオが睨む。その視線には若干殺気がこもっていた。

本気でやりそうだから恐いな。

「ふふ…詠春知っていますよ。日本では貴方のような者を『鍋将軍』…と呼び習わすそうですね」

「ナベ・ショーグン！？」

「つ…強そうじゃな」

ゼクト…、ナギはともかくなんでお前まで本気にしているんだ。

「鍋奉行じゃないのマスター？」

「それで合ってる」

その後も鍋を食べながらたわいもない話をしていると

「ん？」

鍋にいきなり大剣が降ってきた。

見上げると崖の上に長身の男が立っていた。

「食事中失礼〜〜ッ！俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！いっちょやろうぜ！！」

ジャック・ラカン…確か前に南で話題になった剣闘士だったな。

俺は立ち上がり腰の鬼切と蜘蛛切を地面に置く。

「その二本は使わないのですか？」

「さすがにあれを相手にするのには心許ないからな」

ひとまず火車切にするか。

「牡籥（かぎ）かけ―闔ざす総光の門、七惑七星が招きたる、由来艸阜の勢、廉貞零零、急ぎて律令の如く成せ、千歳の儔――」

左手の掌に現れた魔法陣から出てきた柄を握り一気に引く抜く。

「火車切広光」

「フ…フフフフ……」

この笑い方…、どうやら詠春は本気で切れているようだ。

「リオ、抑えておいてくれ」

「貸し一つだよ」

「わかった」

詠春はリオに任せておけば平気だろう。人の姿をしているとはいえ元竜族なのだ。その力は成人男性くらいなら易々と押さえ込める。

瞬動でラカンのいるところに向かう。

「情報その5。虹彩異色の剣士は弱点無し、特徴変わった刀と未知の魔法を使う」

「調査済み、ということか」

「そういうこった。それより本気で来なくていいのか。本気で来る時は黒い翼が生えるって聞いたが？」

「本気で来いと？」

「ああ。どうせやるならそっちの方が面白いからな」

「わかった。後悔するなよ？」

まずは妖刀のの解放だな

「護身破敵（ごしんはてき）とともに、禍災（のぞかさい）を一除かむることを請う――」

呪文を唱え刀身に左手の人差し指と中指を置く

「神隠す十拳（とっか）の一如く火産霊（ほのむす）び、火車来々（かしゃらいらい）、焔羅（えんら）に送らん」

指を刃に沿うように滑らせると刃の部分が赤く光り出す。

これで火車切りの力を解放する。

機会眼も起動する。

「準備は出来たようだな」

「ああ。それとジャック・ラカン」

「なんだ？」

「歓迎しよう。盛大にな」

「へっ。んじゃ、楽しませてくれよ！」

俺が火車切を振り下ろすとラカンは持っていた剣で受け止めようとするがまるでチーズのように切断された。しかも切断面はまるで熱したかのように赤くなっている。

ラカンはバックステップで距離を取る。

「おいおい、マジかよ」

「今の火車切の温度は摂氏数千度。鉄の塊だろうと名刀だろうと容易く切断できる」

「…選択し間違ったな。セーブしときゃよかった」

「ロードは出来んがな」

さてそろそろ再開するか。

「貪り、喰らえ！永久に括れ！グレイプニル！」

背中の翼から１０本もの黒い螺旋状の槍が伸び目標（ラカン）を貫かんと殺到するが

「避けるのは性にあわねえな。気合い防御！」

全て弾かれる。

「盾ごと鎧を貫通できる威力があるのを気合いで弾くか…」

奴もバグキャラというか。さてどうするか。

◇

この戦闘は約六時間続き、結果半径三〇〇メートルを焼け野原にした。ちなみに原因の八割は火車切の能力であった。詠春はその間ずっとリオのアーティファクトで縛られていた。

◇

「まさか…ここまでやるとわ……」

「小僧も…なかなかやるじゃねぇか……。だが四対一で挑んでおいてこの様じゃあ…俺の完敗か」

「俺は…強者と戦えて……満足だがな」

「ヴァン・エウリディーチェ！リベンジすっぞ。必ず決着……付けてやる……ぜぇ」

「ああ……楽しみにして…いよう」

こんな事言ってるが俺は詠春におんぶされているのではっきり言ってかなり締まらない

「止めを刺せばよいのじゃ」

「気に入ったんだろ」

その後何度か衝突した後何故かラカンが仲間になっていた。

第四話（後書き）

バグキャララカン登場

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5266s/

妖刀使いと魔法使い

2011年7月23日11時43分発行